

令和 4 年 5 月 28 日現在

機関番号：14401

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2018～2021

課題番号：18K01191

研究課題名（和文）ビルマ古典歌謡における口頭伝承システムと口唱歌の記述研究

研究課題名（英文）Descriptive Research of Oral Tradition and Mouth-music in Burmese Classical Songs

研究代表者

井上 さゆり（Inoue, Sayuri）

大阪大学・言語文化研究科（言語社会専攻、日本語・日本文化専攻）・教授

研究者番号：40447503

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,400,000円

研究成果の概要（和文）：本研究の目的は、ビルマ古典歌謡の伝承手段である口唱歌を記述・分析し、口唱歌の体系を明らかにすることである。口唱歌とは楽器音を声で言葉で伝えるもので、世界各地の音楽伝承で見られる伝承手段である。本研究では、口頭伝承を可能とする頻繁に用いられる特定の旋律の分析に加え、さらに頻繁に繰り返し用いられる音楽の最小単位「アクウェツ」の分析を行った。その結果、口唱歌で伝えられる数多くの「アクウェツ」のパターンを口唱歌と共に体得することによって、口唱歌のみによって楽器演奏が伝承できる仕組みが口頭伝承の中心にあることを明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の学術的意義は、口唱歌の記述及び口唱歌での伝承を可能とするビルマ音楽の音階構造、旋律パターン及び、音楽の最小単位との関連にまで言及して伝承システムを明らかにしたことである。ビルマ古典歌謡のレパートリーは全ての楽器で共有されているが、口唱歌は楽器の構造に基づく奏法を言葉にしたものであるため、楽器によって口唱歌に相違点もある。奏者によっても違いがある。このように奏者や楽器によって違いがありつつも、互いの口唱歌を聞いて演奏可能な点も興味深い伝承方法である。日本の三味線音楽のように、口唱歌は各国の音楽にも共通する口頭伝承手段である。本研究は口頭伝承の比較研究のための重要な基礎研究になりうる。

研究成果の概要（英文）： This study aims to describe and analyze the system of mouth-music, a means of transmission of Burmese classical songs, and to clarify the system of mouth-music. Mouth-music is a means of transmission found in music traditions around the world, in which instrumental sounds are conveyed by voice and words. I am interested in how oral tradition is made possible. In analyzing the specific melodies frequently used to make oral tradition possible, I also studied akwek, the smallest unit of music commonly repeated. The results revealed that there is a mechanism that enables oral tradition by learning and memorizing a number of akwek patterns conveyed in mouth-music.

研究分野：音楽、民族音楽学、文学

キーワード：ビルマ ミャンマー 古典歌謡 竪琴 楽譜 口頭伝承 口唱歌

## 1. 研究開始当初の背景

研究開始当初まで、報告者は2004年度以降、科研費補助金によって一貫してビルマ古典歌謡に関する歴史文書、一次資料の調査収集、音楽実践の体得的調査及び研究を行ってきた。本研究開始前に実施した科研費研究は次の通りである。2004 - 2006年度科学研究費補助金(特別研究員奨励費)「ビルマ歌謡創作の営為：18 - 19世紀における歌謡創作概念の分析を中心として」。2007 - 2009年度若手研究(B)「ビルマ歌謡におけるジャンル形成：18 - 19世紀の歌謡創作技法の分析を中心として」。2010 - 2013年度若手研究(B)「ビルマ古典歌謡におけるジャンル形成：歌謡集写本と旋律の分析を通して」。2014 - 2017年度基盤研究(C)「ビルマ古典歌謡における伝承と創作：写本と楽譜の分析を中心として」。さらに、その間、次の2冊の単著を発表した。2010年度研究成果公開促進費 学術図書、『ビルマ古典歌謡におけるジャンル形成』、大阪大学出版会。2012 - 2013年度研究成果公開促進費 学術図書、『*The Formation of Genre in Burmese Classical Song*』、大阪大学出版会、である。以上の研究過程の中で、本研究開始当初は、報告者は書承と口承から為されるビルマ古典歌謡の伝承システムについて研究を行っていた。

ビルマ古典歌謡の歌詞は文字として文献に記録されてきたが、楽器演奏は基本的に口頭伝承である。口頭伝承の方法として、師が示した見本を真似する、聞いた音を再現するという方法があるが、最も重要な手段は口唱歌である。口唱歌はビルマ語では「バザッサイン(口の楽器)」と呼ばれる。ビルマ古典歌謡の口唱歌では、楽器音、すなわち単音、和音の他、タイミング、奏法や指使いを伝えることができる。申請者自身が体得した古典歌謡のレパートリーが増えるに従い、楽器構造、音階構造、旋律パターンの熟知が口唱歌の理解に繋がることを認識するに至った。歌謡の伝承は、申請者が2014 - 2017年度科研費研究で明らかにしてきたように、マンダレー市のドー・キンメイ氏とその弟子間において手書き楽譜での伝承実態も見られる。しかし、西洋音楽のように楽譜を見ながら演奏を行うことはなく、基本的に師が記憶の補助として必要に応じて楽譜を見ながらそれを口唱歌で弟子に伝え暗記させる方法が一般的である。報告者の豎琴演奏の師であるドー・キンメイは存命中最も古い世代に属する奏者であり、曲を口唱歌で唱えられる希少な音楽家でもある。さらに口唱歌はどの奏者にも共通して用いられる口唱歌と、奏者によって独自に用いられている口唱歌がある。ビルマ古典歌謡は全ての楽器で曲のレパートリーを共有しているが、口唱歌は楽器構造に基づくため、楽器間で共通している口唱歌と共通していない口唱歌もある。一方で、奏者や楽器によって異なる口唱歌を用いている者同士でも通じるという面もある。口唱歌の理解は、ビルマ古典歌謡の口頭伝承にとって非常に重要な課題である。

## 2. 研究の目的

本研究の目的は、ビルマ古典歌謡の伝承手段である口唱歌を記述・分析し、口唱歌の体系を明らかにすることである。口唱歌とは楽器音を声で伝えるもので、世界各地の音楽伝承で見られる伝承手段である。申請者はこれまで書承と口承から為されるビルマ古典歌謡の伝承システムについて研究を行ってきた。本研究では口承手段の口唱歌に焦点を絞ってその記述と分析を行った。特に、報告者がこれまでの研究で行ってきた旋律パターンの分析のみならず、音楽の最小単位「アクウェツ」に注目し、膨大な数の「アクウェツ」のパターンが口唱歌と結びつき伝承されていることを明らかにすることが本研究の目的である。

## 3. 研究の方法

本研究の方法は以下の四つに分類できる。

(1)マンダレーの豎琴奏者ドー・キンメイの豎琴の口唱歌による伝承を報告者自身が受け、口唱歌とそれが指示する音の対応の記録を進めた。(2018年8月27日 - 9月23日、2019年4月7日 - 9月24日)。

(2)ドー・キンメイが弟子に口頭伝承で古典歌謡の歌及び豎琴演奏を教える様子をビデオで記録し、伝承がされる音楽の最小単位(アクウェツ)の構造に注視しながら、その単位の口唱歌を記述した。(2018年8月27日 - 9月23日、2019年4月7日 - 9月24日)。

(3)2010-2013年度科研費にて撮影した故ウー・ミンマウンの手書き楽譜約3000枚を整理し、同一曲のバリエーションや、「アクウェツ」の抽出を行った。並行して、楽譜画像の調整処理を進めた。

(4)豎琴演奏における口唱歌を中心に口唱歌の記述を行い、その体系を明らかにした。具体的には、各音および和音、装飾音、演奏パターン、特定の旋律それぞれを口唱歌でどのように表現しているかを記述した。

以上の四つのうち、(1)は本研究の要の作業である。報告者は1999年以降20年あまりビルマ古典歌謡の歌唱と豎琴演奏の実技の訓練を受けてきている。報告者自身が口頭伝承でビルマ古典歌謡を学ぶことは、報告者がビルマ古典歌謡の口頭伝承の構造を体得的に理解するに至った重要な作業である。さらに(3)も報告者の研究の柱となる作業である。口頭伝承で発生する多くのバリエーションを大量の楽譜に残した故ウー・ミンマウンの手書き楽譜は本研究にとって最重要といえる資料である。

#### 4．研究成果

報告者は研究期間中に現地調査を2回実施した。2018年度（2018年8月27日 - 9月23日）と2019年度（2019年4月7日 - 9月24日）である。うち2019年度はサバティカルを利用して半年間の長期調査を実施した。2020年度及び2021年度も現地調査をする予定であったが、コロナ禍のため渡航ができず、その間はそれまでに収集した資料、データの整理と分析、及び国際学会での発表を中心に研究を進めた。

現地調査時には、報告者が2010-2013年度科研費研究として実施した、豎琴奏者故ウー・ミンマウンの手書き楽譜の調査・撮影を、ウー・ミンマウンの家族の協力を得て引き続き進めた。さらに、撮影した3000枚を超えるそれら画像を整理し、歌謡ジャンルごと、同一曲のバリエーションごとの楽譜の整理を進めた。現地調査時には、ウー・ミンマウンの妻であり豎琴奏者でもある著名な指導者のドー・キンメイの元に滞在し、口頭伝承による指導実践を受け、口頭伝承の体得的理解に努めた。その上で、本研究の目的である口唱歌の記述研究を進めた。

上記の作業に基づき、ビルマ古典歌謡の口頭伝承システムを、口唱歌の体系から明らかにし、口頭伝承が音楽の最小単位である「アクウェッ」のレベルで構造的になされているさまを提示した。「アクウェッ」の存在を初めて明らかに示した点、「アクウェッ」が音楽を構成し、口頭伝承を可能としている点を示したことが、本研究の一番の成果である。その研究成果を国際学会にて四回にわたって口頭発表を行った。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 1件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 Inoue Sayuri	4. 巻 34
2. 論文標題 Creating Literary Works in the Burmese Court: Analyzing U Sa's Anthology in Palm-leaf Manuscripts	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 Occasional Papers (Institute of Asian, African, and Middle Eastern Studies, Sophia University)	6. 最初と最後の頁 31-53
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

〔学会発表〕 計4件（うち招待講演 1件 / うち国際学会 4件）

1. 発表者名 Sayuri Inoue
2. 発表標題 Oral Transmission System of Burmese Classical Songs Overview of Bazat-hsaing or Mouth-music
3. 学会等名 5th Symposium of the ICTM Study Group on Performing Arts of Southeast Asia (PASEA) (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Sayuri Inoue
2. 発表標題 Oral Transmission System for Burmese Classical Songs: Bazat-hsaing or Mouth-music for Burmese Harp Music
3. 学会等名 13th International Burma Studies Conference (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Sayuri Inoue
2. 発表標題 Bazat-hsaing or Mouth-music: Oral Transmission Systems of Burmese Classical Songs
3. 学会等名 45th ICTM (International Council for Traditional Music) Conference (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Sayuri Inoue
2. 発表標題 Some Features of the Formation of Genre in Burmese Classical Songs: Using Burmese as an Indispensable Language
3. 学会等名 Myanmar studies without Burmese? by The School of Culture, History and Language, at Australian National University (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2020年

〔図書〕 計3件

1. 著者名 金子亜美, 小倉志穂, 神野知恵, 田中有紀, 井上さゆり	4. 発行年 2019年
2. 出版社 風響社	5. 総ページ数 86 (69-83)
3. 書名 『音楽を研究する楽しみ：出会う、はまる、見えてくる』（執筆箇所「私にとってのミャンマー音楽研究文献研究と実践」）	

1. 著者名 Sayuri Inoue	4. 発行年 2019年
2. 出版社 Lin Lun Hkin Sapei taik	5. 総ページ数 355 (197-201)
3. 書名 Saung Hsayagyi Inlay U Myint Maung Gounpyu Ahmattaya Sazumya (執筆箇所 “Hsaya U Myint Maung ye nouk kyezu ( 豎琴奏者ウー・ミンマウンの楽譜の功績 ) ” )	

1. 著者名 Sayuri Inoue	4. 発行年 2019年
2. 出版社 Lin Lun Hkin Sapei taik	5. 総ページ数 355 (204-205)
3. 書名 Saung Hsayagyi Inlay U Myint Maung Gounpyu Ahmattaya Sazumya (ビルマ語翻訳箇所 “Kyama go saungauk gita thin ge de hsaya U Myint Maung i kyezu ( “My dept to Saya Myint Maung ” by Judith Becker ”	

〔産業財産権〕

〔その他〕

Myanmar Classical Music  
<https://inoues.myportfolio.com/>  
大阪大学・研究者総覧・研究者詳細・井上さゆり  
<http://www.dma.jim.osaka-u.ac.jp/view?l=ja&u=951>

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------